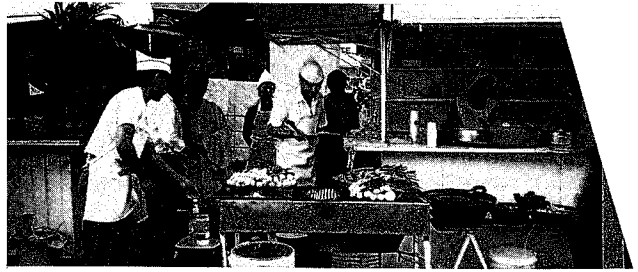


なんとメキシコ、されどメキシコ(海外だより)

著者	相原 好江
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	ラテンアメリカレポート
巻	9
号	2
ページ	44-45
発行年	1992-06-20
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00006480

海 外 なんと メキシコ



タコス屋台を素通りなんて、おお!?

夜、突然の腹痛に目が覚めた。体中が火照り心臓が激しく鳴った。間をおいて襲うその痛みに声もない。闇夜の怖さを忘れ無我夢中で表に助けを求めた。昼夜常駐している2人の守衛が私の姿にどぎもをぬかれ、「救急車」なんて叫んだ。それだけは勘弁してくれという余裕はあった。守衛に抱き抱えられる様にして救急病院に飛び込んだのはいいが、夜間というのに超満員。トイレを探して右往左往している内に気を失いかけたらしく、気が付いたときには便器を抱えていた。下痢と嘔吐でトイレに入ったら最後出られない。ドアの前で守衛が心配そうにしてもそもそもしているのが気配でわかるのだが、術なし。やっとトイレから出て痛み止めの注射を打って貰い、飲み薬を2種類いただいて家に帰ったのが午前2時。この時、守衛が神様に見えたのは私の錯覚ではあるまい。その後2日、飲まず食わずの時間が過ぎ、やっと眩しいメキシコの太陽を身に浴びた時の嬉しさ。これで私も人言う「黄色いパスポート」を手にした訳だ。大体これは赴任2、3カ月で取得できる。「赤いパスポート」と違い取得には恐ろしい程の痛みをともなうがこれ無くしてメキシコでの生活は保証されない。ただしこれも取得すれば良いと言うものではない。取得後も常に胃の中に常備して、管理万全を期さねばならない。不幸にも我が同僚はこのパスポート取得に7キロの減量代を支払った。運が悪いといえどそれまでだが、手当が遅かったがための代償である。

さてパスポートの取得がすんだら、次は市内交通機関への挑戦だ。格段に安いメトロ・バス（距離に関係なく一律20円弱）はもとより、ペセロ（小型乗合バス、走行距離により料金が異なるが最高で50円強）に気後れ無く乗れたら、卒業だ。特にペセロはルートさえ頭にたたき込んだら、正に自家用車そのもので、乗車したい場所ですぐ指し指を出して合図し（これがまた気恥ずかしく、様になるのに半年はかかる）、また都合の良い所でブザーを押して降ろして貰うという訳で、まさにドア・ツー・ドアとはこのことではないか。お陰で高度2300メートルのメキシコ・シティで運動を控え、歩行距離を控えていたら、次に来るものは自ずと知れた肥満。

しかしこの肥満にも妙薬はある。誰でも1度は泣かされる赤と緑のチリ・ソースだ。屋台のタコス屋で威勢のいいおじさんにちょいと声をかけられたら最後、日本蕎麦屋の前を素通りできないのと同じく、寄ってしまう。熱々の焼き立てのトルティージャにお好みの具を挟み、チリ・ソースをたっぷりかけて味わうタコスの醍醐味はマル秘。許すならあの美味しいメキシコのビールをご同伴願えたら最高ののだが、どうした訳か、屋台のタコス屋には清涼飲料水しか置いていない。私はビールは「毒消し」と頭から信じているので、タコス屋に危険を感じたら「持ち帰り」として貰い、家でゆっくりビールで賞味する。黄色いパスポートも時には色褪せるもので、盲信は禁物。くだんの同僚はこのタコスに当たったので、私が屋台のタコス屋を利用するなんぞと言ったら最大級の軽蔑を投げってくれる。こっちは開き直ったもので、あんたが当たったからと言って、私も当たるとは限らない、要は研磨された識別眼と月並みだが黄色いパスポートという訳だ。幸に人に軽蔑されようと我が黄色いパスポートは揺るぎなく光輝いて健在だ。しかしこの屋台のタコス屋も最近ではコレラの巣と白眼視され、当局の規制の対象に上がり、その数もどんどん減ってきている。

同様な目にあっているのが、ところかまわず風呂敷を広げた露店商だ。市民の生活の汗と汚れの結晶が凝縮していて、暇つぶしに見て歩くにはもってこいの青空市場なのだが、メトロやバス・ターミナル等の人通りの多い公共の場所を占領しているのだから当局にとっては問題児だ。つい先日もメトロの連絡通路で乗客がつとつまずいて風呂敷店に突っ込んでしまった（といっても足元に広げられたお店しか逃げ道はなかったのだが）。さあ、大変、これが基で売り子と乗客が喧嘩となり、あげくの果て殺人事件に発展してしまった。連邦区当局は待っていましたとばかり、規制に乗り出し、公共施設での営業禁止一掃作戦を展開し始めた。この煽りでメトロをにぎわせた露天商が1つ消え、また1つ消えてもうメキシコ・シティの風物詩は先細り。

何か足元が涼しい。さて足元が涼しいだけでなく、心もぐーっと冷え込むのは人の金を預かって太ってい



ドアからドアへ。肥満の敵とはいっても、ねえベセロ。

銀行屋さん。いまはよりの銀行民営化でちっとはましな業務改革に乗り出してくれるのかと期待したのがこれがさっぱり。口座開設に何度も足を運ばせてくれた末に、まじな顔して「non」と言う。少々神経に触ったので、係長とやりあった。最初から「non」と言ってくれたらこちらでも打つ手はいくらでもあったのに、それがくやしかった。日本女性（おしとやかが売り物らしいが）がからんで来たのでメキシコの男性も真剣だ。負けてはならじと相手は絶対引かない。発奮してふと我に返ったら、店内は深海のごとくの静寂。そして3日後、くだんの係長の首が見事にすぐ替わっていた。これがメキシコ流合理化!?

ならついでに合理化して欲しいのが店内の無駄な行列。どの銀行へ行っても大の大人が延々と行列をしている。もの不足の国での配給行列ならまだしも、先進国へ片足を突っ込んだと自負するメキシコのここシティの銀行内は己型や川型の行列ありでさながら馬券売場の賑わいである。よくもお客をこんなに並ばせて恥ずかしくないものかと思いきや、人言って「メキシコ人は相手を怒らせるのが趣味」とか。こうなったら黙って引き下がるしかない。今では自衛策として持ち金は家に置くことにしている。1ドル=3000ペソ強なので2000ドルも換金すると分厚いペソの札束がドカーとくる。せいぜいこの厚みを日ごと楽しんでいるほうがまだしも精神衛生上良い。それに住居での盗難の心配は24時間くだんの2人の守衛が入居者をチェックしているので、まずあり得ない。ただしこのチェック業務も行き過ぎるとお手挙げになるのが名だたるメキシコのフィエスタ（パーティ）の時。我が共同住宅は午後7時30分を過ぎると、居住者所有の車以外は居住区の敷地に入り込めない。車持ちの招待客は有無をいわさず締め出されてしまう。かといって路上駐車しようものなら、メキシコのこと、タイヤの1つも失うのを覚悟しなければならない。招くほうもつらいが、招かれる方はさらなるもの。それでも皆万全を期してパーティと聞いたら来る来るわ、メキシコでのパーティでは1人呼んだら、その3倍は料理を用意しなければならないと人に聞いたが、これほんと。歌の文句の「友

達の友達は……」じゃないが、私とこの人一体どんな関係と聞きたくするような竹ノ子客が、それだけではない、時にはトイレから見ず知らずの人が出てきてぎょつとすることもある。島国根性に徹した我々には到底理解しかねるが、彼ら流の「楽しくなくちゃパーティじゃない」には脱帽。ともかく食うは、喋るは、踊るはでなにかエネルギーの発散場所を間違えているのではと、日本の仕事虫は考えてしまう。でも1年もするとこのドンチャン騒ぎにもどっぷり浸り、今じゃ私もお声のかかるのを待っている。慣れとは怖い。

さて最後はこれ語らずにメキシコあらずの目玉商品、メキシコのマチスモおとうちゃん。女（私もまだ女）と見れば、ははーんと片手を挙げて合図して、脂肪腹を突き出す。そして満面の憎めない笑顔。「何が」と相手にしなければそれまでだが、落ち込んでいる時など、私はまだ生きてるんだなんて気にさせてくれるから不思議だ。それに彼らは休みともなれば、おかあちゃん同伴（これ反対ではない、なんせ財布を握っているのはおとうちゃんだから）でスーパーでお買い物、それも真剣な眼差しで品選び（これとておとうちゃんのふところ具合にかかっている訳だから）しているその頼もしい姿、そしてレジ嬢の手先を見つめる表情も厳しく、いやはや、あっぱれ。やたらスーパーの隅っこで奥方の買い物を今か今かと他人ごとのように顔をしかめて待っているどこ様のおとうちゃんと比べたらどっちが偉い、それは財布を握っているおとうちゃんが何といったって一番頼もしく偉い。

さてあれやこれやと重箱の隅をつついていいる間に、紫にけむるハカラダの花に迎えられ赴任したメキシコにもまたこの花の時期がやって来た。季節感のあまり無い当地でもこの花だけは私にとって春をつげるもの。この1年間、予期せぬ場面で思わぬエネルギーを消耗させられ、有り難くも手に余るしわと白髪を頂戴したが、しかしながらそれを心から恨めないのが、このメキシコ・シティでの生活。七色にも咲き誇るブーゲンビリアに思いを託し、コレヒオ・デ・メヒコより万感を込めてビバ・メヒコ、そしてビバ・ハボン。

（あいはら・よしえ/在メキシコ・シティ海外派遣員）